

■続・らくだ日記（一〇八）■

葉牡丹にアンドロメダの咀嚼音 小川 桂

（句集『アンドロメダの咀嚼音』・二〇二五年・ジャプラン刊）

作者は一九三七年生まれ、札幌市在住。八四年「氷原帶」に入会され、幾つかの変遷を経て、二〇二一年に「現代俳句協会」「形象」に復帰とある。「形象」主宰の高岡修氏の帯文には、『葉牡丹にアンドロメダの咀嚼音／なん』という詩想の深さだろう／なんという詩語の豊かさだろう／ここに萌芽しているのは／私たちのまだ知らぬ／詩界の新しい構造である』とあるが、読み進むと大仰でも無根拠でもないことが分かる。生涯の一冊という位置に据えられた句集でもある。

たとえば、第一章から好きな句を引けば、『雲の胎から桐の胎から水の一族』へはつ夏の声帯があるポプラの樹』へ菜を間引く触感ふいにくる母性』へ極めれば鳥類秋のサキソフォン』へ羽根があつまる白桃の先天性』へ水仙を選びみずみずしい献体』へにれの木の波長寒鴉が澄んで』へ白亜紀の消印がある青とかげ』など。一句目は、雲にも桐にも胎の在処を感じ取り、胎に水の属性をもつて「一族」となす。この天体や樹木に親近感を感じるのは、省略されている人間の母性も水の一族だからだ。詩的把握が感覚的なだけでなく、そ

の奥に未知の詩の世界の「構造」的な新しさも入り込み、不思議な実感に誘い込まれる。

第二章では、冒頭のアンドロメダの句の他に、『肉球そろり雪が力を抜いた朝』へ大雪像ぞろりぞろりと回遊魚』へ春キヤベツ神話をゆるく芯に置く』へ戦争とトマト煮崩れてゆく残暑』へ詩人の貌をする木枯しの湖』へシンバルの一打で足りる紅葉山』など。冒頭句については、葉牡丹の巻きの深きは宇宙まで及び、アンドロメダ星雲から咀嚼音が届いてくる。アンドロメダが食われているのではないが、星雲そのものが巨大なけものめいて宇宙の星々でも咀嚼しているようだ。宇宙生成の深い謎が咀嚼音となつて、葉牡丹の遙かな底から作者には届いてくるのだろう。

第三章からは、『蝶百頭いて殺人のミュージカル』へ白蛾落ちふつくらとあり情死』へ保育器の中遠泳はもう少し』へ献体離陸噴水は脱いで脱いで』へポスターの昭和に月が長居する』へ夕暮れの枯木の品位に星がくる』など。

紙幅が足りないが、作者の俳句の世界は、常識的な時間空間の壁が取り払われて自在。異質なモノやコトの世界をいつの間にか自然に引き寄せてしまう。従来の現代詩的な難解性は少なく、独自の感覚は自由に開かれていて、読者を不思議な実感へと引き込む。作者の自由な認識や感受の世界が構造的にも展開され三誦して飽きない。

■続・らくだ日記（一〇七）■

摘草の尻餅ひとつひつじ雲

長井 寛

（句集『十七会』・令和七年・現代俳句協会刊）

作者は、出版社の専門誌編集に従事されたのち、平成十四年に退職後、俳誌「遊牧」に入会。平成二十八年には第十七回現代俳句協会年度作品賞を受賞。平成三十年から令和六年まで現代俳句協会の会員誌『現代俳句』の編集長を務められた。本書は、この八年間の六百句を収める。

水温みパンとことばと暮らす日々

巻頭近くのこの佳品がまず目に留まる。水温む春の光に心和みながら、作者には日々の糧の「パン」と「ことば」があれば足りる。そんな慎ましい姿勢が伝わってくる。

投地してピエタ像になる駅伝

野火猛りひんがしをゆく縄文人

魚は氷に上りて人は荒野ゆく

故山来て青大将の軒聴く

先ずは句集の前半から。作者の句風は平易で穏やかでときどき知的な計らいが絡む。難解性を抑えて音韻的にも読みやすく整えられている。作者の平明な世界はそう簡単に崩れはしない。一句目の、知的な誇張的比喩もどこか安定

感がある。また、二句目の感受性と想像力もユーモラス。三句目は毎年の起点を思われるようで、スペイナル的な人生行路が伝わるかのようだ。四句目の虚実の絡みも面白い。また、句集後半の作からは、次のような句を拾つた。

産土の伏流水や初句会

電子という激流前に春惜しむ

水涸れて狐狸のゆき交う副都心

夕焼けに合掌小焼けに感謝

一句目は、伏流水が祝意的地力となつて働く。二句目には、五月雨の最上川ならぬゆく春の電子の激流に向き合つている現代的イメージを造型。三句目では、自然を削り都市化を進める人間の欲望に生活の場を失いつつある狐狸の窮境を描く。四句目、「夕焼け小焼け」も一度分解してみると、祈りと感謝とニュアンスの違いが面白く浮き上がる。

最後に、冒頭掲出の句に戻れば、春に童心が引き出されたような無邪気の句になつた。土手の斜面あたりで蓬などを摘んでいるのだろうが、うつかり足を滑らせて尻餅をついてしまつた。ただその尻餅は春草の上にやわらかく吸い寄せられた。そして、春の空には、その感触が移り昇ったかのように真白な羊雲が一つ浮かんでいる。主人公は作かもしけないが、心は子どもに帰つている。

最後に、一か所以外は前書を付けず、一句独立の俳句追求にかけた志の高さにも共感したことをつけ加えたい。

水に入るごとくに蚊帳をくぐりけり

三好達治

（三好達治句集『柿の花』所収
昭和五十一年・筑摩書房刊）

何気なく書棚眺めた時に目に飛び込んできて、久しづりに三好達治句集を再読した。私の俳句の出発点も、石原八束の句集と三好達治の詩集であった。

この句集には、『柿の花』百十句と『路上』六十句が収録されている。すでに石原八束を通してさまざまな句が紹介されてきた。〈柿うるる夜は夜もすがら水車〉へ蚊帳をつる川のむかひのすまひかな〉へあんばんの葡萄の臍や春惜しむなど。

一句目は、人間の文化などの熟成は単調な営みの上に支えられているような象徴性を感じさせる名品である。興味ある方は音韻分析されてもよい。母音と子音が内容に沿つて見事に働いている。二句目は、川を挟むことで、情景の広やかさと夕涼の気が広がってくる。三句目は、「江戸川べりに乙女子どちのたまふもの」との前書きがあるように、春たけなわの川べりへの賑やかな吟行風景が浮かぶ。「あんば

んの葡萄の臍」も程よい色気を譲えてユーモラスな明るい一句。

この他にも、〈凜として蠟螂は葉をわたりけり〉へ鸚鵡叫喚日まはりの花ゆるるほど〉へ王陵に牛を放つや秋の雲〉へ石仏をめぐりて蝶のおとろへし〉へででむしのえりうつくしき初時雨〉など、動物を詠んだ写生句からも生動感が的確に伝わってきて読んでいて飽きない。「王陵」と「石仏」の句は「鷄林 十三句」と前書がある作品群の二句。「ででむし」の句は下五の「初」が「えり」（＝頸のあたり）に光りを立てている感じを生み効果的。

さて、冒頭の「水に入る」の句だが、蚊帳と無縁の生活をしている今の若い世代にどのくらい伝わるだろうか。やはりここは青蚊帳であろう。蚊帳の縁をすこし上げて中へ身を入れるときに、ひやりとした涼しさを感じるのである。「水に入る」ような涼しさとは言い得て妙だ。

その解釈をしたうえで、次のイメージも引き出されようか。「水に入る」の奥には「入水」の意味が潜んでいる。青やかな蚊帳の向こうの世界は、異界めいてきそうだ。多少強引な読みかもしれないが、このアンビバレンントな世界を達治自身は蚊帳に感じていたかどうか。勇み足を承知で、この句をさらに読み解いてみたいと思つた。

還暦の少年梨の木を植えん 福本弘明

（第四句集『梨の木』・文學の森刊）

作者は、一九五五年北九州小倉生まれ。現在、「天籟通信」代表で、現代俳句協会副会長。穴井太に師事されたが、穏やかな方で、私にとっては一歳違ひの兄のような存在。

過去の句をいくつか引けば、へうたたねの夢に白萩ふくらはぎ／ほか弁のほの字をなぞる業平忌／凝り性の父が秋刀魚のけむり中／桐咲いて一番近いひと口説く／風花をいまだに知らぬ足の裏など、平明で人間へのやわらかな情を感じさせる句柄に特色があつた。

上掲の「梨の木」の句については、作者自ら背景と句への思いを次のように述べている。

「桃栗三年柿八年」に続く言葉はいろいろあるが、「柚子は九年で花が咲く、梨の大馬鹿十八年」と書かれていた葉室麟氏のエッセーが気に入つて句にしたものだ。/ 還暦を迎えたときに、残りの人生を長くても十八年くらいだろうと思いつめたのだが、すでに九年が過ぎた。あらためて光陰人を待たずを思い知り、昨年の六月に職を辞した。

この句は句集名になつた作だけあって、表向きはユーモラ

スで軽い捌きに見えるが、ゆつくり味わつているうちに作者の深い未来への祈りにとどく。〈少年や六十年後の春の如し 永田耕衣〉を思い浮かべる向きもあろうか。少年の頃の心躍りを保ちながら生きてきた「大馬鹿」の還暦の自分。そのときめきをいま新たに解き放つように、「梨の木」を植えようというのだ。花が咲くのは十八年後かもしれないが、そして万が一自分がこの世を去ることがあるかもしれないが、そのときはまたこの木に心躍りを覚えてくれる少年がいるにちがいない。還暦まで少年の心を忘れずに来た過去と、梨の木の開花を期待する十八年後の未来と、大きな時間の流れを十七音に凝縮して明るいタッチで描き上げた作かと思う。

他にこの句集ではたくさんの句に惹かれたが、次の句をいまたは引いておくにとどめよう。〈裸木となりて阿修羅は無二の友〉／霧の湿原みんな尻尾の先を立て／もうすこし言葉が欲しいソーダ水／まっすぐな時間を曲がる蝸牛／めしべから見物席がよく見える／野火走る国に未完のカムイ伝／夜桜や同じ長さの夜を持ち／朝ドラの時間に伸びる夏の草〉。社会や人間にに対するシニカルな目は時折感じるものの、やはりこめるような厳しい批評や重苦しさはなく、全体的には平明で穏やか、そしてちょっぴりユーモラス。自由な振れ幅を見せるユニークな作にしばらく楽しく向き合わせていただいた。

うさぎめく君ら花びら餅日和 赤羽根めぐみ

（『現代俳句カレンダー2025』
（東京四季出版刊）より）

（東京四季出版刊）より）

現代俳句協会の今年のカレンダーの一月は、

土中こそ聲あふれおり福寿草 高野ムツオ

の色紙に始まり、二十三名の協会員の新年の句が並ぶ。その第一句が上掲の赤羽根さんの句である。ちなみに、高野氏の「福寿草」は正月用の鉢植えではなく、野生のものであろうが、土中のさまざまな生物の声が立ち昇つてくるようで、ゆたかな心持にさせられる。他にこんな句も。

たちまちに遠景となる大旦 鳴原さき子

木と紙の国と言はれて空つ風 鈴木 牛後

生國の海を語らい年酒酌む 村上 友美

たしかに我々は、期待と共に元旦を待ちわびるが、当日が過ぎるとあつという間にどんどん離れて行ってしまう。

「遠景」とは、時間的意識を空間的イメージに変える作者の魔法だ。また、二句目は一冬を厳しく吹きつける空つ風に対して、家屋の方は堅固な石でも煉瓦でも鉄でもなく、「木と紙」であると、やや誇張気味に日本の精神的風土に

も踏み込んだようなあしらいになつていて。三句目、年酒を交しているのは旧知の友同士か。いつの間に話題はそれぞの生國の「海」のことになると。広やかな豊穣の海、荒れ狂つた海、多様な海の記憶を地酒歎談しながら三箇日はどんどんと過ぎてゆく。深い記憶が豊かに繙かれるのだ。

話を元に戻すと、冒頭の赤羽根さんの句の軽妙な明るさ異色とも言える。「花びら餅日和」は大胆な造語だが、雅な

雰囲気は残しながらも、ここでは市井に下りている。柔らかな肌触りを思わせる淑氣と言えようか。そして、痛快なのは、それらの「静」の気品を子供らの命が明るくかき回す。幼子たちは「うさぎめく」さまに敏捷に軽快にはしゃぎまわり、生命の光を振りまく。いま眼前で跳ねまわっている「君ら」幼子たちは、やがては少女から大人になり、花びら餅をゆっくり味わう日が訪れる事だろう。眼前の時間は未来へとひらいてもいるのだ。

文體的には、助詞や切れ字を用いず、名詞のみの構成だが、ひらがなを巧みに交えながら視覚的にも簡潔でやさしい印象を生んでいる。一つ間違うと威圧的にも働く「君ら」も、ここでは幼子に向けた語りかけのようで、親しく樂しい光をくぐり抜けている。

世界中、こんな明るい一年にしたいものだ。